

# セクシュアリティの多様性

## ——「同性愛」から見る性の歴史——

金 田 仁 秀

(実施要綱)

今日では、「同性愛者」が「同性愛者」として、さまざまなメディアに登場することが可能になってきた。例えば、日本においては、マツコ・デラックス、ミッツ・マングローブ、はるな愛、IKKOなどは、さしたる違和感なく多くの番組に出演するようになってきているし、海外に目を向けるならば、エルトン・ジョン、ジョージ・マイケル、リッキー・マーティン、ジョディ・フォスターなど、カミングアウトした多くのスター達が世界的に活躍している。しかしながら、彼／彼女らは、依然として「異性愛者」の「他者」として周縁化されている。また、「同性愛者」といっても、実際のところ、それは均質な存在ではないことは、ここに挙げた「同性愛者」のスター達を一瞥しただけでも明らかであろう。彼／彼女らが、「レズビアン」、「ゲイ」、「トランスセクシュアル」、「異装者」のどれに属するのか、或いは属さないのかを容易に決めることはできない。こうしたカテゴリーは、時には重なり合い、時には拮抗する。「同性愛者」というカテゴリーは、「異性愛者」というカテゴリーと同様に多様であって、こうした均質化が他者生成の常套手段であることを考えるならば、ここにおける権力構造が自ずと見えてくる。それは、歴史的、社会的、文化的な磁場で構築される性の言説に関係しているのであって、決して、単一の歴史を持つものでもなければ、普遍的な真理に基づいているものでもないのだ。したがって、「同性愛」自体の多様な歴史を考察し、その文化的差異を認識することは、現代の異性愛中心主義を脱自然化する視点を生み出す契機になる。

「公開セミナー」においては、「同性愛」に関心がない聴衆がほとんどで

あると予測し、日本や西洋における「同性愛」の言説をできるだけ幅広く、歴史的に概観することとした。その中で、ここでは導入的に述べた、昨今の動向とルネサンスの「同性愛」について記述したい。

## I. 最近の「同性愛」を巡る動向

世界では、同性婚やシビル・ユニオン、シビル・パートナーシップを認めている国があるが、最近では2011年7月に、ニューヨークで同性婚を認める法律が施行された。また、9月には同じくアメリカにおいて、「同性愛者」の軍務禁止という米軍規定が撤廃された。オバマ大統領が、同性婚の禁止は違憲であると述べているように、現在のアメリカにおいては、概して「同性愛者」への抑圧は軽減される方向にあるといえる。イギリスにおいては、2005年にシビル・パートナーシップ法が施行されており、翌年に登録を行ったカップルは1万6千組以上に上っている。他方、日本においては、同性婚が議論されることはほとんどなく、それが数年のうちに可能となる見込みは皆無といってもいいだろう。それは、日本において、「同性愛者」であるとカミングアウトしている国会議員が一人もいないことから伺える。但し、日本でも2011年4月に初のゲイ区議会議員が誕生していることは「同性愛者」にとって明るい兆しといえるだろう。いずれにしても、それぞれの場所において、「同性愛」や「同性愛者」の位置は大きく異なっている。同性婚が一般化している国もあれば、未だに「同性愛者」が死刑となる国もある。それらは、それぞれの歴史を刻印しながら、常に流動的な性の言説において作り上げられているのだ。では、そうした歴史の一片として西洋のルネサンスについて触れてみたい。

## II. ルネサンスにおける男性間の欲望

ルネサンスといっても、時代や場所によって性の言説はさまざまであるが、大雑把に言えば、ヒューマニズムとともに、古典への探求がなされることによって、プラトンのアイデアやギリシャの愛が復興し、「同性愛」の言

説も花開いたといえる。それを表す代表的な人物として、ミケランジェロを挙げることができるだろう。彼は1532年、55歳の時にカヴァリエーリという名の美男の貴族に出会い、愛情を捧げている。例えば、彼に送ったソネット96番などは、この青年に対する愛を明白に表している。

ミケランジェロから少し時代を経て、イギリスにおいてもルネサンスの波が押し寄せ、「同性愛」の言説が隆盛した。それは、シェイクスピアの『ソネット集』やマーローの諸作品を見れば分かる。特に前者の20番は、イギリス文学を「同性愛」の視点でどう読むかを試すテキストである。18世紀から19世紀には既にシェイクスピアの『ソネット集』を危険視する見方が出てきているが、今日まで、同性愛嫌悪に満ちあふれたイギリス文学研究者達の多くも、これを「同性愛」のテキストとしては読んでこなかった。「偉大なる」シェイクスピアを「同性愛」から切り離すために、『ソネット集』の語り手はシェイクスピアではないと解されたり、逆に、伝記的な読みをする場合には、友情に過ぎないと解されたりしてきたのだ。双方において共通していることは、シェイクスピアを「同性愛者の汚名」から守るという基盤に立っているということである。もちろん、シェイクスピアの時代には、現代のような「ゲイ」の概念はなかったのであるから、現代の感覚をそのまま当てはめることは、時代錯誤の読みになる危険性を孕んでいる。しかしながら、この詩集が男性から男性への情熱に溢れていることは確かであって、それを抑圧し無視する読みとは、同性愛嫌悪以外の何ものでもでもない。

このことは、マーローの“The Passionate Shepherd to His Love”を異性愛の視点でのみ読もうとする態度と重なる。マーローは「同性愛者」として知られており、『エドワード2世』のガヴェストンなどが示すように、作中にも「同性愛」を描いている。また、そうした事実を目を向けなくても、牧歌というジャンルが「同性愛」を喚起するものであったことを考えるならば、この詩は十分に同性間の情熱と読むことができる。もちろん、ここでは異性愛の恋愛詩の可能性もあるものの、それをあらかじめ排除する視

点は、「同性愛」を他者化する言説の賜に過ぎない。

同じく牧歌として、バーンフィールドのソネットも、「同性愛」を明白に描き出している。彼の詩は、シェイクスピアのソネットに比べると、洗練されていないことは確かであるが、逆にそのエロティックな欲望は赤裸々であり、強い情熱を示している。彼の伝記については子供がいたこと位しか分かっていないが、そうした伝記は、このテキストが表す欲望の読みとは関係がない。ここで概観した4つのルネサンスのテキストが、男同士の強い欲望を刻印していることは明白である。それは、決して逸脱的な欲望ではなく、現代の言説とは異なる場に位置している。このことは、「同性愛」が決してそれ自身で固有で普遍的な歴史的場を占めるのではなく、流動的なセクシュアリティの言説において生成されていることを表している。それは、歴史的、社会的、文化的な構築物として、多様なセクシュアリティを構成する一つの要素なのだ。

## お わ り に

本セミナーでは、ルネサンスの男性間の欲望に続いて、17～18世紀の女性同士の欲望と男性間の「同性愛」言説の基盤といえるプラトニズムを概観し、多様な性の歴史を考察した。そこから、理論的な視座として、フォーコーの議論に言及しながら、19世紀後半における「同性愛者」の「誕生」について述べた。さらに、西洋とは異なった「同性愛」の歴史として、『日本書紀』に始まる日本における「同性愛」について論じた。そこでは、公家や僧侶の社会から武家社会を経て、江戸時代に一般庶民まで広がった様を紹介したが、春画などに見られるように、日本における「衆道」はありふれたものであり、時には粹なものとされていたのだ。

このように歴史的な視点で見ると、「同性愛的」な欲望は決して珍しいものではないことが分かる。しかしながら、現代においては、それが異質なものとして周縁化されている。それは、「同性愛」という欲望を「他者」として排除することで、異性愛体制を自然化していくイデオロギーの作用

に過ぎない。セクシュアリティとは、歴史的、社会的、文化的な構築物である。このことは、異性愛体制も歴史的、社会的、文化的な構築物であるということの意味している。それは、結局のところ抑圧と周縁化に依存する、偶発的な制度なのだ。そうであるならば、多様なセクシュアリティを認識し、その構築性に目を向けることが、セクシュアリティの言説を考察する際に必要不可欠であろう。それは、現代の強制的異性愛体制を問題化しながら、新たな性の可能性を開く視座なのだ。

以下は、本セミナーのテキストである。すべてに言及することはできなかったが、これらすべてが、セクシュアリティの多様性を理解する助けになるだろう。

(テキスト)

## I. 最近の「同性愛」を巡る動向

- ・ ニューヨークでの同性婚を認める法律施行 (2011/7/24)
- ・ アメリカ「同性愛者」軍務禁止の米軍規定を撤廃 (2011/9/20)

## II. ルネサンスにおける男性間の欲望

### 1. Michelangelo Buonarroti の *To Tommaso de' Cavalieri* (1532–1547)

96

With all my heart I love you; if not so,  
may I turn ashes, like dry wood in fire;  
may I lose my soul, if elsewhere set aglow.

And if enchantment kindles warm desire  
for alien beauty in some other eyes,  
then take your own away and I'll expire.

It's you alone I cherish, idolize;  
if not, my hope die, spirits quail and dwindle,  
though once in your love so steadfast, buoyant, wise . . .

心から君を愛している。もし、そうでないなら  
火中の乾いた木のように、私は灰になるだろう。  
もしどこか別の場所で燃えるのなら、私は魂を失うだろう。

そして、もし、魅惑が、他人の目に映る他の美に対する  
欲望に火を付けることがあるならば、  
あなたは立ち去ってくれ。私は息絶えるから。

私が大切にし、崇拝するのは君だけだ。  
そうでないなら、私の希望は死に、心は気落ちし、萎えてしまう。  
君の快活で、賢明な、確かな愛を一時は得られたけれども。

## 2. William Shakespeare の *Sonnets* (1609)

61

Is it thy will thy image should keep open  
My heavy eyelids to the weary night?  
Dost thou desire my slumbers should be broken  
While shadows like to thee do mock my sight?  
Is it thy spirit that thou send'st from thee  
So far from home into my deeds to pry,  
To find out shames and idle hours in me,  
The scope and tenor of thy jealousy?  
O no, thy love, though much, is not so great;  
It is my love that keeps mine eye awake,  
Mine own true love that doth my rest defeat,  
To play the watchman ever for thy sake.  
For thee watch I, whilst thou dost wake elsewhere,  
From me far off, with others all too near.

きみの姿が現れて、この重いまぶたを閉じさせず、  
倦み疲れる夜更けまで私を起こしておくのは、きみの意志なのか。  
きみに似たまぼろしが眼の前にちらつくのは、  
私の眠りを邪魔するつもりでいるからなのか。  
家からこんなに遠く離れたところまで、きみの霊を  
送りこみ、私の行動に首をつっこもうというのか。  
私の乱交や、暇つぶしっぷりを暴こうというのか。  
それが疑い深いきみの目的で、本音なのか。  
いやちがう。きみの愛は豊かでも、こんなに大きくはない。  
私を目覚めさせておくのはこの私の愛なのだ。  
私のこの真実の愛が、私の安息をぶちこわし、

きみのために夜警の役をつとめているのだ。

私はきみゆえに目覚めている。きみもよそで起きている、  
私から遠くはなれて、ほかの者たちのすぐそばで。

20

A woman's face with Nature's own hand painted  
Hast thou, the master-mistress of my passion;  
A woman's gentle heart, but not acquainted  
With shifting change, as is false women's fashion;  
An eye more bright than theirs, less false in rolling,  
Gilding the object whereupon it gazeth;  
A man in hue, all hues in his controlling,  
Which steals men's eyes and women's souls amazeth.  
And for a woman wert thou first created,  
Till Nature as she wrought thee fell a-doting,  
And by addition me of thee defeated,  
By adding one thing to my purpose nothing.  
But since she pricked thee out for women's pleasure,  
Mine be thy love, and thy love's use their treasure.

きみの顔は自然が自らの手で描きあげた女の顔だ、  
わが情念をつかさどる男の恋人よ。  
女の優しい心はあるが、不実な女どもの習いでもある  
移り気などはついぞあずかりしらぬ。きみの眼は  
女のよりもずっと明るい光をはなち、見つめる相手を  
金色に染めるが、あちこちに不実な流し目をくれはせぬ。  
姿かたちは男だがすべてのかたちをうちに従えている。  
じっさい、きみははじめは女として創られたのだ。



だが、自然の女神が、きみを創っているうちに恋におちて、  
よけいな物をくっつけて、きみを私から奪ってしまった、  
私にはゼロでしかない一物をくっつけて。

だが、彼女は女の楽しみのために君を選んだのだから、  
私の楽しみはきみの愛情、愛の実習が女たちの宝だ。

### 3. Christopher Marlowe の “The Passionate Shepherd to His Love” (1599)

Come live with me and be my love,  
And we will all the pleasures prove  
That valleys, groves, hills and fields,  
Woods, or steepy mountain yields.

There will we sit upon the rocks,  
Seeing the shepherds feed their flocks  
By shallow rivers, to whose falls  
Melodious birds sing madrigals.

. . . . .

The shepherd swans shall dance and sing  
For thy delight each May-morning:  
If these delights thy mind may move,  
Then live with me, and be my love.

一緒に住んで、私の恋人になってくれ、  
そうしたら、あらゆる楽しみを味わおう。  
谷や木立ち、丘や野原、  
そして森や険しい山々が生み出す楽しみを。

岩の上に腰をかけ、  
小川のほとりで羊たちに餌をやる  
羊飼いを眺めよう。小川のせせらぎに合わせて  
美しい歌声の小鳥たちもマドリガルを歌うだろう。

.....

五月には、毎朝、君の喜びのために、  
羊飼いの若者達に、踊り歌ってもらおう。  
もしこんな楽しみが君の心を動かすなら、  
一緒に住んで、私の恋人になってくれ。

#### Marlowe's "The Baines Note"

"That St John the Evangelist was bedfellow to Christ and leaned always  
in his bosom, that he used him as the sinners of Sodoma. That all they  
that love not tobacco and boys were fools."

「使徒ヨハネはキリストの情夫で、いつも彼の胸に寄り添っていた。キ  
リストはヨハネをソドムの罪人として使った。たばこと少年を愛さな  
い奴は馬鹿だ」

#### 4. Richard Barnfield の *The Affectionate Shepherd* (1594)

XVI.

Oh would to God he would but pittie mee,  
That love him more than any mortall wight;  
Then he and I with love would soone agree,  
That now cannot abide his Sutors sight.  
O would to God (so I might have my fee)

My lips were honey, and thy mouth a Bee.

ああ、彼が私を哀れんでくれたら  
どんな人より彼を愛している私を  
そうしたら、彼と私はすぐに愛で結ばれ、  
彼に言い寄る輩たちに、我慢ができなくなっているだろう。  
ああ、（見返りが得られるように）  
私の唇が蜂蜜で、君の口が蜂であつたら。

### Ⅲ. 17～18世紀の女性同士の欲望

#### 1. Catherine Philips の “To My Excellent Lucasia, on Our Friendship” (1651)

I did not live until this time

Crown'd my felicity,

When I could say without a crime,

I am not thine, but thee.

This carcass breath'd, and walkt, and slept,

So that the world believ'd

There was a soul the motions kept;

But they were all deceiv'd

For as a watch by art is wound

To motion, such was mine:

But never had Orinda found

A soul till she found thine;

Which now inspires, cures and supplies,

And guides my darkened breast:  
For thou art all that I can prize,  
My joy, my life, my rest.

No bridegroom's nor crown-conqueror's mirth  
To mine compar'd can be:  
They have but pieces of the earth,  
I've all the world in thee.

Then let our flames still light and shine,  
And no false fear controul,  
As innocent as our design,  
Immortal as our soul.

時が私に幸福を与えるまで  
私は生きていなかった。  
私はあなたのものではなく  
あなただと、罪無く言えるこの時まで。

この体は息をし、歩き、眠った。  
だから世間は、これを動かす  
魂があると信じていた。  
でも、世間はみなだまされていた。

というのも、時計が手で巻かれるように、  
私もそうして動いていただけ。  
でも、あなたの魂を見つけるまでは、  
オリンダは魂を見つけていなかった。

あなたの魂は、今、私の暗い胸を  
鼓舞し、癒し、満たし、導く。

私が大切にするのはあなただけ、  
私の喜び、私の人生、私の安らぎ。

どんな花婿の喜びも、征服者の喜びも  
私の喜びとは比較にならない。

彼らは地の一部を持っているだけ、  
私はあなたの中に、全世界を持っている。

私たちの炎を明るく輝かし続けましょう。

どんなうわべの恐れにも支配させないように。  
私たちの想いと同じくらいそれは無垢、  
私たちの魂のようにそれは不滅。

## 2. The Ladies of Llangollen (Lady Eleanor Butler and Sarah Ponsonby)

*The Hamwood Papers* (1785–1821)

Monday, May 26<sup>th</sup> 1788.—My beloved and I went to the sweet hanging meadows over the Mill; what a pretty simple scene did we behold. Between the branching oaks just over the Wheel the Bridge of one arch; the young Miller, his wife and children, sitting on the battlement.

愛おしい人と私は水車の上の美しい急斜面の牧草地に行った。なんて純真で美しい景色を見たことでしょう。水車のちょうど上の枝分かれているオークの間に、アーチがある橋があり、若い粉屋、妻、子供達が屋根に座っていた。

I kept my bed all day with one of my dreadful Headaches. My Sally, My Tender, My Sweet Love, lay beside me holding and supporting my Head.

ひどい頭痛で、一日中寝ていた。私のサリー、優しく愛おしい人は、私の頭を支えて横にいてくれた。

#### IV. 古代の「同性愛」

##### 1. Plato の *Symposium* (『饗宴』) と *Phaedrus* (『パイドロス』)

・ Paederasty (少年愛) とプラトニズム

##### 2. 聖書の逸話

・ The Friendship of David and Jonathan 1 *Samuel* 17-26, 2 *Samuel* 1

I am distressed for thee, my brother Jonathan: very pleasant hast thou been unto me: thy love to me was wonderful, passing the love of women. (2 *Samuel*, 1:26)

私の兄弟ヨナタン、あなたを思って私は悲しむ。あなたは私にとって喜びだった。私への愛は素晴らしく、女の愛に勝っていた。

・ The Story of Ruth and Naomi *Book of Ruth*

And Ruth said, Intreat me not to leave thee, *or* to return from following after thee: for whither thou goest, I will go; and where thou lodgest, I will lodge: thy people *shall be* my people, and thy God my God. Where thou diest, will I die, and there will be buried. (*Book of Ruth*, 1:16-17)

そしてルツは言った。あなたのもとから離れ、あなたを追わずに帰れなどと言わないでください。私はあなたの行くところに行き、あなたが泊まるところに泊まります。あなたの民は私の民、あなたの神は私

の神です。あなたの亡くなるところで私も死に、そこに葬られます。

## V. 性の歴史と「同性愛」の「誕生」

### 1. Michel Foucault の *The History of Sexuality* における指摘

This new persecution of the peripheral sexualities entailed an *incorporation of perversions* and a new *specification of individuals*. As defined by the ancient civil or canonical codes, sodomy was a category of forbidden acts; their perpetrator was nothing more than the juridical subject of them. The nineteenth-century homosexual became a personage, a past, a case history, and a childhood, in addition to being a type of life, a life form, and a morphology, with an indiscreet anatomy and possibly a mysterious physiology. Nothing that went into his total composition was unaffected by his sexuality. It was everywhere present in him: at the root of all his actions because it was their insidious and indefinitely active principle; written immodestly on his face and body because it was a secret that always gave itself away. It was consubstantial with him, less as a habitual sin than as a singular nature. . . . Homosexuality appeared as one of the forms of sexuality when it was transposed from the practice of sodomy onto a kind of interior androgyny, a hermaphroditism of the soul. The sodomite had been a temporary aberration; the homosexual was now a species. (Foucault, *The History of Sexuality*)

周縁的性現象に対するこの新しい追求は、結果として倒錯というものの組み込みと個人の新しい特性別定義をもたらした。男色一かつての世俗的あるいは宗規的法律がそう呼んだもの—は禁じられた行為の一つであった。それを犯したものは、その法律的主体にすぎなかった。十九世紀の同性愛者は、一個の登場人物となった。一つの過去と一つ

の歴史と一つの少年期であり、一つの性格、一つの生の形態なのだ。一つの形態学でもあって、そこには一つの露骨な解剖学と、ひょっとして一つの神秘的な生理学が伴っている。彼が総体としてそうであるところのいかなるものも、彼の性的欲望から離れることはない。彼の内部の至るところに、彼の性的欲望は現前している。それは彼のあらゆる行動の内部に隠れている、というのも、それは彼の行動の油断のならぬ、無際限に積極的な原理に他ならないからだ。それはまた、彼の顔や体に恥ずかしげもなく書き込まれている。何故なら、それはあらゆる機会に自らを露呈しまう一つの秘密なのだから。それは彼の基質と分かち難く結びついていて、習慣上の罪というよりは、異形な本性なのだ。(中略) 同性愛は、それが男色の実践から、一種の内的な半陰陽、魂の両性具有へと変更させられた時に、性的欲望のさまざまな形象の一つとして立ち現れることになったのである。かつて男色家は性懲りもない異端者であった。今や同性愛者は一つの種族なのである。

## 2. 「同性愛」言説の形成

- ・ 19世紀半ばからヨーロッパで「同性愛者」の「発見」
- ・ 法医学、病理学、歴史学、文化人類学などが性的逸脱者を「創造」
- ・ 「同性愛」解放運動が自らを弁護しながら、「同性愛者」を「創造」
- ・ 見えなかったものが可視化されたのではなく、名付けの行為によって生産／流通
- ・ ワイルド裁判による、階級、セクシュアリティ、「同性愛」の結びつき

## 3. 19世紀における「同性愛」解放運動

- ・ Karl Heinrich Ulrichs (カール・ハインリヒ・ウルリヒス)  
*The Riddle of "Man-Manly" Love* (1864-80)
- ・ Edward Carpenter (エドワード・カーペンター)



*Homogenic Love* (1894)

- ・ John Addington Symonds (ジョン・アディントン・シモンズ)

*A Problem in Greek Ethics* (1883), *A Problem in Modern Ethics*  
(1891)

- ・ Henry Havelock Ellis (ヘンリー・ハヴェロック・エリス) and J. A. Symonds

*Sexual Inversion* (1897)

#### 4. 法改定と **Wilde** 裁判

- ・ The Criminal Law Amendment Act of 1885

“Any male person who, in public or private, commits or is a party to the commission of, or procures or attempts to procure the commission by any male person of, any act of gross indecency with another male person, shall be guilty of a misdemeanor, and being convicted thereof shall be liable at the discretion of the Court to be imprisoned for any term not exceeding two years, with or without hard labour.”

私的、公的に他の男性とひどいわいせつ行為を行ったもの、行おうとしたもの、そうした行為に関与したもの、斡旋したもの、斡旋しようとしたものは、不品行の罪に値し、法廷の判決によって重労働を含む、或いは含まない2年以下の投獄の刑に処する。

- ・ Oscar Wilde's Defence (1895)

#### VI. 日本における「同性愛」

##### 1. 奈良・平安・鎌倉時代の公家・僧侶の社会

- ・ 『日本書紀』 卷九「阿豆那比之罪」

「小竹の祝（しのはふり）と天野の祝（あまのはふり）と、共に善しき友たりき。小竹の祝、逢病して死りぬ。天野の祝、血泣ちて日

はく、『吾は生けりしときに交友たりき。何ぞ死にて穴を同じくすること無けむや』とひて、則ち屍の側に伏して自ら死ぬ。仍りて合せ葬む。」

・『伊勢物語』四十六段

「むかし、をとこ、いとうるはしき友ありけり。片時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく対面せで、月日の経にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、目かるれば忘れぬべきものにこそあめれ」といへりければ、よみてやる。

目かるとも思ほえなくに忘らるる時しなければ面影に立つ」

・白河院、鳥羽院などの美童寵愛

・仏教における児小姓

・『徒然草』第五十四段

「御室に、いみじき児のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能ある遊び法師どもなど語らひて……」

## 2. 鎌倉・室町時代の武家社会

・足利幕府における稚児小姓制度

義満と世阿弥

・武家社会における念契

織田信長と森蘭丸

## 3. 江戸時代の一般社会

・歌舞伎の役者買い

男娼としての「舞台子」や「陰子」

・若衆歌舞伎禁止（1652）以降、「陰間」の発生

・井原西鶴『男色大鏡』（1687）

- ・春画に見られる男色

## VII. 性に纏わる理論的視座

### 1. ジェンダーの歴史化からセクシュアリティの歴史化へ

- ・セックス／ジェンダー体制  
ヒジュラ、ベルダッシュ、ニューハーフ、おかま、マッチョゲイ、  
少年 etc.

### 2. 映画の中のレズビアン・ゲイ―「同性愛」の周縁化

- ・『殺しのドレス』（原題 *Dress to Kill*, 1980）
- ・『羊たちの沈黙』（原題 *The Silence of the Lambs*, 1991）
- ・『氷の微笑』（原題 *Basic Instinct*, 1992）

### 3. レズビアン・ゲイ

- ・「レズビアン」・「ゲイ」になる／であるための条件は？
- ・Adrienne Rich の強制的異性愛（“Compulsory Heterosexuality”）
- ・レズビアン存在（“lesbian existence”）とレズビアン連続体（“lesbian continuum”）
- ・Monique Wittig の “women” と “woman”; “woman” ではない “lesbian”

### 4. 性的指向（Sexual Orientation）／セクシュアリティ（Sexuality）／ ジェンダー・アイデンティティ（Gender Identity）

- ・着ぐるみとしての欲望
- ・逸脱しない性自認はあり得るのか？
- ・Gender Identity Disorder?
- ・Transsexual とレズビアン・ゲイ

## 5. セクシュアリティを越える可能性

- ・『プリシラ』(原題 *The Adventures of Priscilla*, 1994)
  - ⇒ 女性／男性を誇張して、どちらにも属する／属さない
  - ⇒ 女性／男性の境界の転覆

### 参考文献

- Barnfield, Richard. *The Complete Poems of Richard Barnfield*. n. p.: Kessinger, 2009.
- Faderman, Lillian ed. *Chloe Plus Olivia: An Anthology of Lesbian Literature from the Seventeenth Century to the Present*. New York: Viking, 1994.
- Fone, Byrne R. S. ed. *The Columbia Anthology of Gay Literature: Readings from Western Antiquity to the Present Day*. New York: Columbia UP, 1998.
- Foucault, Michel. *The Will to Knowledge: The History of Sexuality Volume 1*. Trans. Robert Hurley. London: Penguin Books, 1998.
- The Holy Bible. London: Clays Ltd, 2001.
- Marlowe, Christopher. *The Complete Poems and Translations*. New York: Penguin Books, 2007.
- Michelangelo. *The Complete Poems of Michelangelo*. Trans. John Frederick Nims. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1998.
- Plato. *Lysis, Phaedrus and Symposium: Plato on Homosexuality*. Trans. Benjamin Jowett. New York: Prometheus Books, 1991.
- Rich, Adrienne. “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence.” *The Lesbian and Gay Studies Reader*. Ed. Henry Abelove, Michele Aina Barale, David M. Halperin. NY and London: Routledge, 1993. 227–254.
- Shakespeare, William. *The Sonnets*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Wittig, Monique. “One Is Not Born a Woman.” *The Lesbian and Gay Studies Reader*. 103–109.
- 井原西鶴『男色大鏡』東京：明治書院, 1992.
- 『日本書紀』東京：岩波書店, 1967.
- プラトン『プラトン I』東京：中央公論社, 1966.
- 松尾 聡『徒然草全釈』東京：清水書院, 1989.
- 森本 茂『伊勢物語全釈』京都：大学堂書店, 1973.